景観資料としての写真をめぐって

藤永 豪

はじめに

今年度で、本COEは5年間のプログラムを終了することになる。筆者はその中で、2003年10月から2006年3月までの2年半をポストドクター研究員として在籍させていただいた。その間、いくつかの地域を歩くことができた。その中には、いわゆる「澁澤写真」の現地確認のために出向いた場所もあったし、COEの先生方のフィールドワークに、半ば強引に金魚のフンのようにくっついていった場所もある。本報告では、限られた期間ではあったが、本COE在籍中にめぐったいくつかの地域の景観をもとに、「澁澤写真」の解析を念頭におきつつ地域を記録する上での写真資料の有効性、そして、逆に写真の中の景観から地域をどう読み解くことができるのか、その可能性と限界、そういったことについて、地理学の立場から述べてみようと思う。もっとも、ほんのわずかな在職期間であり、また途中で、現在お世話になっている大学に赴任するためにCOEの業務から離れたこともあって、まとまった論考があるわけでもないが、COEでのフィールドワークやその前後の地域調査をとおして考えたこと、感じたことを述べることで、その代わりとしたい。

Ⅰ　地理学における景観資料としての写真

(1) ――地理学における景観概念

筆者の専攻する地理学における「景観」とは、もともとドイツ語のランドシャフト Landschaft の訳語であり、造語であった。ランドシャフトには単なる目の前に広がる風景を指すのではなく、元来「場所」や「地域」といった空間的な意味合いが含まれていた。そのため、景観という訳は、用語法上の混乱や矛盾から、不適切な部分もあるとされ、景域、風景、相観、地域、風土、時には環境とも訳され、活発な議論がなされてきた（小野寺 1995）。ちなみに、英語のランドスケープ Landscape にも「領主の所有する領域」という意味が含まれていたようである。いずれにしても、景観を探ることは空間を分析することであり、地理学においても重要な研究対象であった。

さて、欧米における景観研究では、サウアーがその著書、『景観の形態学』（*Morphology of Landscape* 1925）において、文化が景観を形成する、と主張したように、（文化）景観の背後にはそれを形成する人間集団の文化的差異が存在し、景観の形成過程を探ることは地域の文化的差異や特質を見出すことにつながるとされた。なかでも、ドイツでは人間の居住形態（特に農村形態）からその形成過程を探る研究が盛んになされた。農村は、水利や地形、植生などの自然条件や農業活動そのもの、土地の所有状況、社会集団、これらを取り巻く社会経済環境を含めた人文条件によって、その形態が規定されるものとして、様々な側面から景観の形成過程が研究されるにいたった。

一方、日本において、景観という言葉が定着したのは、第二次世界大戦前からである。これは上述のドイツ景観学派の影響を受けたものであった。特に1910年代から1960年代にかけて、盛んに調査・研究がなされ、集落地理学の一時代を築いた。しかしながら、その分析の多くは、もっぱら、集落の形態

分類に終始し、欧米のような農業文明の違いや方向性の違いといった成因の分析まではいたらなかった（竹内 2004）。

（2）――説明資料あるいは記録としての写真

このような景観研究では、基本的にはその形態を言語で説明し、その裏付け資料として大縮尺の地図や地籍図が用いられた。こうしたなか、おそらく日本において最初に写真が資料として提示されたのは、前述した小田内通敏の著書『帝都と近郊』（1918）である（図1）。写真と合わせて、スケッチダイヤグラムも適宜使用されている。

ただし、これらの写真はあくまで説明あるいは補足資料としての「画像」であった。すなわち、写真は「記録」として大きな意味を持つが、景観資料として、「いかなる社会的コンテキストのもとで形成され、当事者（作成者）のどのような意図がこめられていたか、またその形態が絶えず変化した事情や異なった時点においてそれを解釈する （あるいは、生きた）人たちによってどのような異なった意味が与えられたか、といったことに対する反省はなかった」（竹内 2004）。

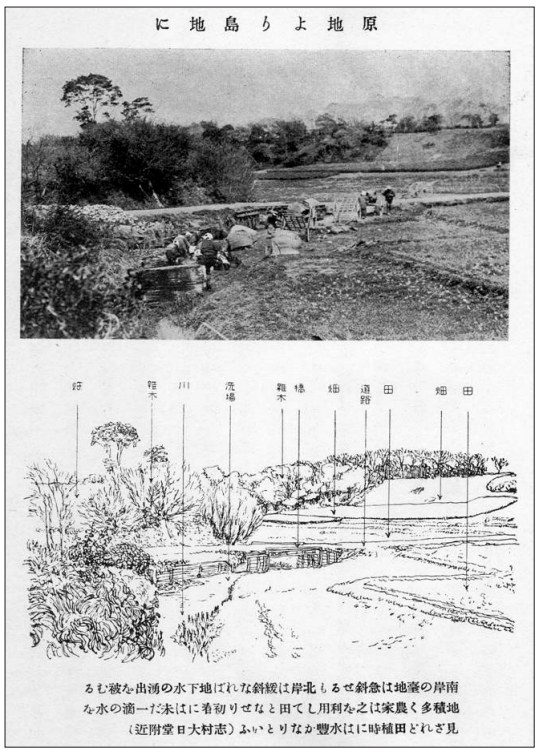

図1　『帝都と近郊』の中で用いられた写真とダイヤグラム。（小田内〈1918〉『帝都と近郊』より引用）

もちろん、こうした写真の撮影と使用のあり方は、本COEプログラムが模索してきた「写真を読む」という学術的行為とは別にあるわけであるから、それを安易に批判することは筋違いの話であり、評価すべき点も多々ある。実際、矢野（2003）によれば、写真を記録と表現の手段として、積極的に調査に活用したのは地理学の分野だという。石井の『地理写真』（1988）や田中の『地学写真』（1935）を例に、地誌作成のために写真が多用されてきた流れと動向について言及するとともに、民俗学における写真の扱いとを比較しながら、一定の評価を与えている。特に田中の著書『地学写真』の中での写真の撮影と利用について、「道路網、水系、耕作系等が表現された地域全体」と「家屋のタイプ」や「生業」、「人間の風貌」などに関する写真が複数まとめられており、いわば「村落を被写体とした組写真」的な形式によって地域が表現されていることに注目している。さらにこの写真利用について、田中の言を借りつつ、「地理的景観の意味を正しく把握し、その観察・記録・観察地点の適切な取捨選択を行う」といった「学術的作為」が作用しており、これは「演出」とは異なる一つの表現方法であると述べている。当然、地理学の分野では、地域を知る手がかりとして、景観を読み解こうとするものであるが、田中の写真の利用法は、まさにこの立場を踏まえ、実践しようとしたものともいえる。地域を表現する手段としての可能性が写真には存在するのである。

その後、1970年代に入ると、日本でも景観を単なる形態の分類に終わらせず、その景観に込められた地域の文化とその意味を解釈する研究が見られるようになった。構造主義や記号論の導入、イメージや風景をめぐる人文主義的研究が盛んになり[(1)]、景観がいかにして構築され、どのような社会的意味を持つのか、その資料の批判的検討も含めて見直されるようになった。

Ⅱ　写真の中の景観

(1) ――切り取った景観

写真とは、目の前の景観を切り取ることができる便利な道具である。実際、地理学や民俗学関連の学術論文の中では写真が多用されるとともに、写真を用いて地域を記述した書籍が多数出版されてきた。[(2)] この場合、写真には二つの意味合いが存在すると考えられる。

一つはフィールドを一枚の紙片の中にとじ込め、記憶を呼び戻し、景観を他者に説明するという「記録」としての枠組みである。このような写真の利用はフィールドを対象とする以上、必要な手法としてこれまでも見られた。もう一つは明確な対象を写真に撮り、その写真に写し出された景観を解釈するという行為の中に表れた「資料」としての写真である。もちろん、これは撮影者が意図して切り取った景観であり、その解釈は自己と他者両方に対する説明資料としての意味を持つものとなる。解釈の中に客観的事象と意味を捉え、写真資料の意義を見出している（藤永 2004a）。

(2) ――切り取られた景観

しかしながら、その一方で、他者が撮影した写真の取り扱いと解釈が課題となる。撮影というただでさえ主観的な行為が他者によってなされた場合、その結果である写真を資料としてどのように扱えばよいのか。そこに危うさはないのか。「澁澤写真」に切り取られた景観を読み解く上では、このことが大きな問題となる。この点に関して、菊地（2000）は1951年7月に発見された石川県鳳至郡柳田村の野本家におけるアエノコトの写真を例に、写真の解釈についての危険性を示唆している。この写真の中で展開されるアエノコトは、厳しいメディア統制が行われた第二次世界大戦下に軍人の前で演じられたことや、行事を進行する人物が神道式神祭の作法を学んでおり、祝詞や御膳の様子にその影響が如実に表れていることから、「神道」の強い影響を受けた、本来の農耕儀礼としての姿とは異なることが明らかにされている。このような写真の「落とし穴」を避け、他者によって切り取られた景観を読み解くことが、単純でありながら、実に大きな課題となる。

Ⅲ　フィールドの写真をとおして

筆者自身もCOE在籍中はもちろん、その前後においても、日本国内外のフィールドを回り、その景観を写真に収めてきた。ここでは前章までの内容を踏まえ、これら筆者が撮影してきた写真や「澁澤写真」をもとに景観の解釈について考えたこと、感じたことを述べていきたい。

①1枚の写真から

まずは、1枚の写真の中の景観からどのようなことが分かるのか、考えてみたい。写真1は2008年のオリンピックに向け、急ピッチで再開発が進む中国北京市の西城区徳勝門付近から望む景観である。近代的な高架道の向こうにマンションが見える。その間は空き地となっている。かつては土レンガで造られた四合院と、舗装されず、土がむき出しとなった路地、そこで遊ぶ子どもたち、世間話に夢中になる母親といった生活風景が見られたはずである。今は取り壊しを待つ古ぼけた民家が数軒残るだけである。このようなスクラップ・アンド・ビルドによる大規模な破壊と創造の景観が、今の北京を象徴している（藤永2005）。

かわって、写真2はラオス第3の都市であるルアンバパンのメインストリートの様子である。道路わ

写真1　中国北京市西城区徳勝門付近における再開発の様子。（2004年11月）

写真2　ラオス第3の都市ルアンバパンのメインストリート。（2007年9月）

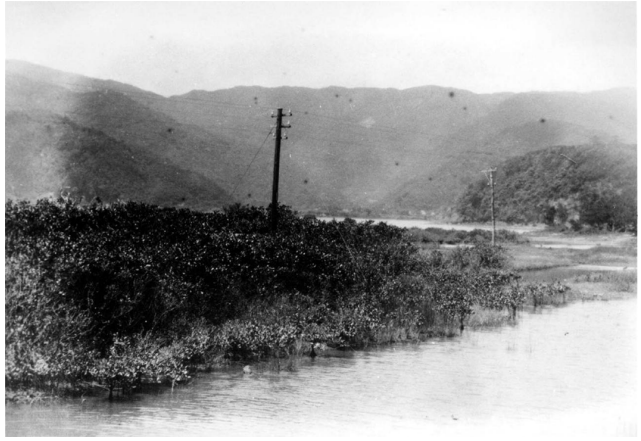

写真3　澁澤写真1（「大島　住用村城自生のマングローブ（谷口熊之助作）」）。（日本常民文化研究所所蔵　整理番号。作とは撮影を示す［12-70］）

きには日本製や中国製のバイクが並び、左脇には庶民の乗り物トゥクトゥクが見える。ラオスでは、1986年からチンタナ・カンマイと呼ばれる経済開放政策によって、市場経済化が進行している。最近では観光に力を入れ、多くの外国人が訪れるようになった。写真左には外国人観光客の姿が見える。また、フランス統治下におかれていた時代の建物が残り、それらが外国人観光客向けのゲストハウスやレストラン、カフェに改装され賑わっている。徐々に進みつつあるラオスの変化を示す景観である。両写真とも、筆者が撮影した写真であるが、そこから経済開放政策の中で変化する街や人々の生活、そして、歴史が見えてくる。

一方、写真3は、「澁澤写真」の中の1枚で、奄美大島の住用村の海岸を撮影したものである。マングローブ以外に、電線と電柱が見える。昭和初期には、すでに離島である奄美大島にも電気が通じていることが分かる。すなわち、この写真は同地域における一種のイノベーション革命を表しているともいえる。ただし、この写真は、当然、他者が撮影したものであり、その解釈には文字資料や聞き取り調査等による裏付けが必要である。この点がおよそ100年間という時間的な空白もあって、その解釈を困難にするとともに、何よりも1枚の写真では、そこに表れた景観のすべてを理解することは難しく、かつ危険であることを示している。

②2枚の写真の比較から

写真4と写真5は佐賀県有明海沿岸の二つの干拓集落の景観である。写真4の久保田町搦（からみ）は江戸期から明治期にかけての干拓によって形成された集落で、入母屋造りの家屋が建ち並ぶ。佐賀藩の干拓事業は天明以降、1780年頃より盛んとなったが、その特色は零細農民による小規模な干拓にある。佐賀

写真4　佐賀平野における江戸時代に形成された干拓集落の家屋景観（久保田町搦）。（2004年1月）

写真5　佐賀平野における第二次世界大戦後に形成された干拓集落の景観（白石町新拓）。（2004年1月）

写真6　佐賀平野における江戸時代に形成された干拓集落の水路景観（久保田町搦）。（2004年1月）

写真7　佐賀平野における第二次世界大戦後に形成された干拓集落の水路景観（久保田町江戸）。（2004年1月）

藩は1783（天明3）年に、藩財政強化のために六府方を設置し、その一部局として干拓事業を担当する搦方を置いた（青野・尾留川編 1976：63-65）。しかしながら、佐賀藩の財政事情は厳しく、搦方は干拓の指導援助を目的としながらも、大規模な支援を行うことはできなかった。しかも、商人資本の参入を禁止したために、小規模な「搦」が林立することとなった。搦の景観には、このような歴史的背景が隠されている。

一方、写真5の白石町新拓は、第二次世界大戦後に、国と県の政策の下に開発された大規模な干拓地である。引揚者も受け入れたが、その最も大きな目的は食糧増産にあった。当然、効率的な農業生産を行うための農村計画が立てられ、写真にも表れているような戦前までとはまったく異なる集落形態をとることになった。家屋景観も搦に比べ、シンプルである。切妻もしくは寄棟造りの家屋が中心で、トタンやスレート屋根を冠した納屋が母屋の脇に配置されている。平屋も多く、同じような形態の家屋が道路に沿って並んでおり、いかにも開拓集落的な景観を呈している。このような景観は、戦後造成された他の干拓集落でもよく見られる。

続いて、写真6は、搦の集落内を流れるクリークである。両岸はコンクリートで固められている。近年まで、佐賀平野はクリーク網が発達し、その脇には柳等の樹木が植えられ、独特の景観をなしていた。しかし、圃場整備によって、耕地と水路が再編成され、クリークと樹木は姿を消した。しかしながら、写真中の民家の敷地の裏には、水辺に出るための階段が残されている。かつて、住民はここで洗い物などを行った。搦ではその名残りが今でも見られ、当時の住民と水との親密な関係が読み取れる。

これに対して、写真7は、新拓と同じく第二次世界大戦後に造成された久保田町江戸の水路である。コンクリート製であることはもちろん、幅も広く、大型の水門が設置されている。搦の水路のように民家と隣接することはなく、完全に農業用水路としてのみの機能を有している。この水門は、まさに戦後日本の農政を象徴する景観といえよう。

以上のように、同じ時代の異なる地域の同じ景観構成要素を比較することで、それらの背後にある形

写真8　佐賀県唐津市厳木町鳥越地区遠景。（2004年9月）

集落（ムラ）
→A鳥越集落
耕作地（ノラ）
→a. イワセトノタニ　b. カキバヤシノタニ　c. アマミズ　d. ウソ　e. ミナミ　f. ヤマナカ
g. マン（ノ）タニ　h. ケタヤマ　i. ホカウラ（クタンダニ）　j. ウーグエノタニ　k. ウツボダニ
l. ウヲヅル
原（ハラ）
→m. ダノクサ刈り場　n. カヤ刈り場
山林（ヤマ）
信仰に関する場所
→⛩稲荷神社　祇 祇園様　弁 弁天様　百 百万様（大日様）　弘 弘法大師様
その他
→ 水 水車小屋　⊥ 経塚（墓地）

写真9　鳥越地区の空間構成（1946年）
（聞き取り調査をもとに国土地理院発行米空中差真「M665」（米軍1946年撮影）の一部を引用・加筆）
注：各場所の位置および範囲は聞き取りにもとづくおおよその範囲であり、必ずしもすべてが正確というわけではない。

成要因や形成過程を、より明確に浮き彫りにすることが可能となる。

③村落の組写真から

続いて、組写真を用いて村落の景観を見てみようと思う。ここで紹介するのは、佐賀県唐津市厳木町の鳥越地区の事例（藤永2004b）である（写真8）。この鳥越地区の空間構成を大まかに分類すると写真9のようになる。鳥越地区における生活空間は、高度経済成長期以前まで、基本的に農業や狩猟、採集といった伝統的な生業活動にもとづいて展開されていた。複数の耕作地のまとまり、すなわちノラが、ムラである集落周辺と河岸、谷筋に沿って立地、散在していた。写真10はその中の一つ、「d. ウソの水田」である。現在では、減反政策や植林によって、ウソを含めて村の水田はその姿を大きく変えている（写真11）。また、谷筋に沿って拓かれた水田には弁天様が祀られていた。鳥越における弁天様は水を司る神であり、天水や沢、谷に湧き出してくる「出水」に頼ってきた人々の水への切なる願いが表れている。しかし、現在では、近代的な灌漑設備の導入や植林のために、弁天様の中には放置されたものもある（写真12）。

一方、ヤマには雑木林が広がり、狩猟や採集、木炭生産の場となっていた（写真13・14）。ただし、ヤマは採草地としても利用され、写真9にも示されるようなはげ山が広く見られた。このことから、はげ山はむしろ、ハラとしての機能を果たしていたと考えられる。ハラには水田に鋤き込むための草を採取する「m. ダノクサ刈り場」や屋根の葺き替えのための「n. カヤ刈り場」などがあった（写真15）。現在ではこれらの村落空間構成要素も植林等によってその景観を大きく変えている。

かつて、鳥越の人々はこれらムラ、ノラ、ヤマ、

写真10　ウソの水田。（2004年9月）

写真11　植林されたウヲヅルの水田跡。（2004年9月）

写真12　カキバヤシノタニの弁天様。（2004年9月）

写真13　イワセトノタニの炭焼きガマの跡。（2004年9月）

写真14　かつて炭焼きに使用されたカシ（中央）。（2004年9月）

写真15　植林されたかつてのカヤ刈り場。（2004年9月）

写真16　稲荷神社。（2004年9月）

ハラを往来し、生活の場として互いを機能的に結び付け、一つの生活空間を展開していた。さらには、その中で、精神的よりどころである稲荷神社（写真16）や祇園様、先祖を供養する経塚、農耕や運搬に欠かせない牛の病気治癒を願った百万（大日）様などを目に見える具体的な地物として設け、祀ってきた。これらすべてがまとまりをもって、鳥越地区の景観全体を形作っていたのである。

このように、システムとしての村落景観の全体を見渡し、その中であらかじめ見るべき景観構成要素を吟味し、各要素がどのようにムラ人の生活と結びつき、何を意味するのかを考察することが景観を考える上で重要であると思われる。こうした視点を逆に「澁澤写真」に向けることで、その中に切り取られた景観を解体、分析し、地域の特性を解明することにつながっていくのではないかと考える。

④「澁澤写真」との比較から

最後に、実際の「澁澤写真」に写し取られた景観と現在の景観を比較してみようと思う。筆者は2006年11月、「澁澤写真」の現地確認のために、鹿児島県の喜界島を訪問する機会を得た（藤永 2007）。ここで紹介する2枚の「澁澤写真」は、1936（昭和11）年に同島阿伝出身の民俗学者・岩倉市郎によって撮影されたものである。写真17は、喜界島の中心地である湾の通りである。キャプションには「盆の大売出し　於湾」とある。現地での聞き取り調査の結果、撮影箇所を同定することができた（写真18）。写真17の通り最奥部ののぼりがたつ商店は呉服店であり、左奥の馬が繋がれているあたりは八百屋で、呉服店の手前の2階建ての店が乾物屋、その手前が理髪店、さらに1軒おいて同じく理髪店、駄菓子屋と店が並んでいた。現在では左手前の商店がガソリンスタンドに変わり、他のすべての商店がなくなるなど、当時の面影はまったく残されておらず、往時の賑わいをうかがい知ることはできない。

また、写真19は同じく喜界島の北部に位置する志戸桶の弁財天と洗濯場である。キャプションには、「観音様の社と洗濯場」とあるが、地元の古老によれば、祀られているのは弁財天で、ウェガー様と呼ばれている。このようなムラの信仰に関わる場所は、現在でも、その景観を大きく変えることなく残されており、とりわけ老人たちの間では、よくその場所が記憶されている。そのため、比較的容易に撮影箇所を同定できた。写真の中には、鳥居や珊瑚石を積

写真17　澁澤写真2（「盆の大売出し　於湾　昭11.8」）。（日本常民文化研究所所蔵［2-25］）

写真18　現在の湾の通り。（2006年11月）

写真19　澁澤写真3（「観音様の社と洗濯場　昭11.3.19　志戸桶」）。（日本常民文化研究所所蔵［1-33］）

写真20　現在の弁財天様。（2006年11月）

んだ囲い、奥にはひときわ背の高いガジュマルの林が見える。写真中央の方形の囲いが洗濯場である。そして、写真20が現在の景観である。撮影地点と思われる道は付け替えられており、おそらく、当時の道は写真右手のサトウキビ畑の中に埋もれていると思われる。この写真は隣接する県道から撮影したものである。ここから鳥居や珊瑚石の囲い、洗濯場は確認できないが、現在も残っている。また、社を覆っていたガジュマルの林は、昭和50年頃の台風によって倒れてしまった。

こうしてみると、人々の生活やこれを取り巻く社会経済環境の変化に合わせて、景観は絶えず変わり続けていることが分かる。そして、その一方で、逆に、変わらぬ人々の思いが過去の痕跡を景観の中に残す場合もある。そんな営々と築き上げられてきた島の暮らしの歴史が、過去と現在の写真の間に横たわっていることを「澁澤写真」は教えてくれる。と同時に、過去と現在の二つの写真資料が互いに補い合うことで、はじめて景観とその背後にある変化の（あるいは変化しない）要因を適切に探ることができることを示してもいる。

Ⅳ　写真の外側へ

――「澁澤写真」の隙間を埋める作業――

以上、筆者自身が撮影した写真や「澁澤写真」をもとに、写真の中の景観から何を読み取れるのか、そして、地域性をどう解釈していくのか、調査の中で考えたこと、感じたことを綴ってきた。ここで、あらためて「澁澤写真」の活用を念頭において、写真という資料の可能性（と限界）について考えてみたい。

確かに写真は景観（の一部）を切り取り、ビジュアルに地域や人々の生活や文化を提示してくれる便利なものである。しかも、場合によっては、文字資料以上の説得力を持ち得、過去の情報を得るための貴重な資料ともなる。しかしながら、その一方で、写真を撮影する、写真の中に切り取られた景観を読むという行為は多分に主観的な作用が働きがちであり、その解釈という点において、はなはだ厄介な代物でもある。一片の紙片の中に切り取られたものやことは、果たして真実なのか、そこに写し取られたものやことは何を表すのか。とりわけ、「澁澤写真」のような他者が撮影した写真には、常にそのような不安定さがつきまとうことになる。

重要なことは、「澁澤写真」も含めた、景観写真の隙間をどう埋めていくかということであろう。前章で述べてきたことからも分かるように、一枚の写真はあくまでその時代のその空間の一断片を表現するにとどまるものである。これをどこまで広げて、客観的に解釈、分析できるのか、これこそ写真を扱う上での限界であり、可能性である。一枚の写真から、分かることはわずかであり、これを組み合わせてその弱点を補うにしても、そこにどのような作為が働くことになるのか、不安な部分がどうしても出てくる。この点を補うためにも、写真と写真の間の隙間を文字資料にしても、聞き取り調査にしても、埋めていく手続きが必要となるであろう。

その隙間を埋める作業とは、同じ場所の時系列的な変化を追い、同時に、異なる場所の空間的な繋がりや断絶性を考察していくことにほかならない。同じ場所の異なる時間の連続を見つけ、異なる場所からその空間的繋がりや差異を見出していく。ある時代の一点のみでなく、違う時代の同じ場所、同じ時代の違う場所を互いに結び付けていくことで、景観の深層が、その意味するところが見えてくる。すなわち写真の外側にまでイメージを広げ、それを裏付ける資料を拾い集めていくことが肝要であると考える。ましてや、数に限りがある「澁澤写真」である。時間的な変化と空間的な変化を念頭におき、個々ばらばらの写真ではなく、これらを両者の意味において繋げていく地道な作業こそが遠回りにして、もっとも近道となろう。一枚の写真が時間と空間という二つの意味合いにおいて、どのように連続していくか、あるいは、どこで切れるのか、こういった点をはっきりさせることで、「澁澤写真」は学術研究の対象としての価値を高めることとなる。

おわりに

以上、これまで、COE在籍中から、感じ、考えてきたことを述べてみた。まとまりもなく、自身の未熟さを露呈するだけかもしれないが、結局、景観と写真を考える上においては、フィールドを自分自身の足で歩くことがもっとも重要ではないかと思う。フィールドを歩く中で、市井に生きる人々の生活とその変化を肌で感じ、それらを自身の身体の中に経験として蓄積していくことで、ようやく写真の中の景観を「見抜く」ことが可能となるのではないか。少なくとも、筆者自身はCOEに在籍しながら、そう感じてきた。生活者の目線で地域を観察し、人々の言葉をつむぎ、同時に、研究者の目線で広域的かつ統合的に捉えていくことが大切であり、その中で「澁澤写真」の活きた位置づけが見えてくる。

本COEプログラムは本年度で一旦、区切りをつけることとなる。しかしながら、今後も「非文字資料」の研究拠点として、調査・研究は継続されていく。その中で「澁澤写真」をもとにした景観と環境に関する「非文字資料」研究がますます発展していくことを望んで止まない。同時に、私のような若輩者を研究組織の末席に加えていただいたことを深く感謝申しあげる次第であります。

（ふじなが・ごう）

【注】

(1) 特に村落をめぐる景観論については、今里（2006）を参照のこと。

(2) 例えば、石井（1974；1989；1999）や香月（1989；2000）など。

【参考文献】

青野壽郎・尾留川正平編　1976　『日本地誌　第20巻　佐賀県・長崎県・熊本県』東京：二宮書店。

石井實　1974　『地域を写す 石井實地理写真集』東京：古今書院。

石井實　1988　『地理写真』東京：古今書院。

石井實　1989　『地と図ー地理の風景』東京：朝倉書店。

石井實　1999　『地理の風景ー古代から現代まで』東京：大明堂。

今里悟之　2006　『農山漁村の〈空間分類〉　景観の秩序を読む』京都：京都大学学術出版会。

小田内通敏　1918『帝都と近郊』東京：大倉研究所。

小野寺淳　1995　「文化景観（1）――文化景観の形成と変容――」高橋伸夫・田林明・小野寺淳・中川正『文化地理学入門』p.133, 東京：東洋書林。

香月洋一郎　1989　『空からのフォークロア　フライト・ノート抄』東京：筑摩書房。

香月洋一郎　2000　『景観の中の暮らし　生産領域の民俗』東京：未來社。

菊地暁　2000　「柳田國男と民俗写真――あるアエノコト写真のアルケオロジー――」『日本民俗学』224：1-33。

田中薫　1935　『地学写真』東京：古今書院。

藤永豪　2004a「写真資料をもとにした景観分析に関する若干の試論――佐賀平野における村落景観の事例――」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』1：202-211。

藤永豪　2004b「中山間地域における住民の環境利用と生活空間の変化」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』2：171-186。

藤永豪　2005　「北京市都心部および郊外農山村の景観変容」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』3：238-249。

藤永豪　2007　「「澁澤写真」の現場を歩いて」『手段としての写真――「澁澤写真」の追跡調査を中心に――』神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料4：42-49。

矢野敬一　2003　「戦前における映像メディアと『郷土』の表象――熊谷元一『会地村　一農村の写真記録』と民俗学――」『日本民俗学』235：34-64。

このほか、2004年11月26日に三班（環境と景観の資料化と体系化）の研究会として開催された、故竹内啓一先生（一橋大学名誉教授、前・駒澤大学教授）による講演「地理学における景観――風景概念の変遷と問題点」を参照させていただいた。この場をお借りしまして、心より御冥福をお祈り申し上げます。